遺そう！ 守ろう！ 北の歴史と文化財　Hokkaido Cultural Property Protection Association

文化情報

会報　Vol.408
令和８年４月１日発行
SINCE 1961
一般財団法人
北海道文化財保護協会

〒060-0002 北海道札幌市中央区北２条西７丁目　かでる２・７ビル９階　電話・FAX；011-271-4220
Website；https://hokkaido-bunkazai.jp　　E-mail；bunho@abelia.ocn.ne.jp

山と海をつなぐ ～当路鹿子舞

「山あがり」を演じる当路鹿子舞（2026年1月18日撮影）

北海道南西部の厚沢部町には、三人一組で鹿に扮して踊る郷土芸能「当路鹿子舞」が伝えられています。

当路鹿子舞は、厚沢部川をさかのぼる人や物の行き来の中で、河口のどんば集落（現江差町字柳崎町）から伝えられたもので、厚沢部川流域の歴史と深く結びついた文化でもあります。

この鹿子舞は、太鼓や笛の音に合わせて中腰で力強く舞うのが特徴の芸能で、現在も地域の人々によって大切に受け継がれています。

当路鹿子舞のような一人立ちで踊る形式は、一般に「三匹獅子舞」と呼ばれます。これは、室町時代の終わり頃に成立したとされます。三匹獅子舞の分布は中部地方以東に限られ、北海道南西部の厚沢部川流域が、その北限として知られています。北限の鹿子舞がもたらされたのは、厚沢部川南岸のヒノキアスナロ伐採が開始された17世紀後半から18世紀初頭と考えられ、林業と結びついて成立した芸能でした。

当路鹿子舞は、明治30年代に厚沢部川河口のどんば集落から伝えられました。当時どんば集落は上流で伐採されたヒノキアスナロを陸揚げを行う、物流や人の集散地でした。

当路集落の人々も、古くからヒノキアスナロの流送をとおして川下の村々と深く関わっていました。こうした交流の結果の一つとして、どんばから当路へ鹿子舞が伝えられたと考えられます。

当路鹿子舞は、文献資料だけでは捉えにくい近世・近代の水運・林業と、その人の往来を、今日に伝える貴重な歴史資料でもあります。

（厚沢部町教育委員会学芸員　石井淳平）